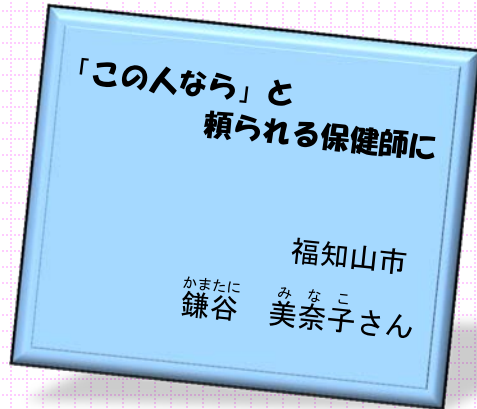


保健師 最前線



旧大江町などが担当エリアである福知山市北部保健福祉センターに異動して半年後の2013年9月のことである。台風18号による豪雨で福知山市は大江町地区を含む多くの民家が床上・床下浸水となった。保健福祉センターが入る市役所大江支所の建物内にも濁流が入り込み1階が150センチまで浸水した。さらに昨年8月には、またしても記録的な集中豪雨による大規模浸水に見舞われ、大江町地区も被害が続出した。

「まだ傷も癒えない被災者に追い打ちをかけるような再度の水害にショックを受けました。中には『2004年の台風23号』でも浸水した被災者の方もおられました…」

台風18号の際には府中丹西保健所などから保健師の協力派遣を受け、被災者支援に全力を注いできた。台風から1年近くたった昨年7月にはセンターの同僚保健師の計3人を中心に被災地を回り健康相談や家庭訪問を実施。「雨の音を聞くとなつらい気持ちになりますか?」「夜は眠れますか?」。被災者に寄り添いながら地道に心の健康状態のケアに努めてきた。

「水害のたびに、高齢のかたたちが子どもを頼って地区を離れてしまい、空き家が目立つようになってきました。地区の中で支え合う人が少なくなるのが心配です」と話す。「保健師が担当する

健康教室に消防などの協力をえて防災の話を取り入れるなど、地域の人が顔を合わせる機会をできるだけ多くつくりたい。そのためにも保健師も普段から地域に顔を出し、地域の人とのつながりを持っておくことが何より大切だと思います」

旧日吉町で2年、地元・福知山市で18年のキ



名物の鬼像と

ャリアを誇る主任保健師さんだ。「『あんたが言うのでお酒をやめとるよ』と健診を受けたかたから声をかけてもらうなど、住民のみなさんに少しでもお役にたっていると思えることが心の支えであり、仕事を続けてこられた拠り所でもあるん

です」。2児の母でもあり、忙しい中での子育てが気分転換だという。

「大事にしていることは?」と質問してみた。「人の話をよく聞き初対面でも、いざという時でも、この人なら相談しやすいと思ってもらえる保健師でありたいです」。即答だった。